

北社会ニュース 第55号

2009年6月29日

発行者：鈴木壮夫

(1) 本日、第273回 北社会

講師：木村文彦氏（高12回）

テーマ：「モンゴルに魅せられて」

先ず、木村氏との思いも掛けなかった“出会い”を読んで下さい。

3年前の2006年はチンギスハーンが国を統一して800年というモンゴルにとっての記念すべき年でした。首都空港の名称も“チンギスハーン空港”に改称した。その年の今頃、私と妻はホランの会の皆さんと初めてモンゴルを旅していた。3年前の6月29日の日記帳には次のように書いてあった。「夕方、ツエンケルキャンプ地に到着。日本から来られている天体観測者のご夫婦と札幌の“蝶”の研究者にお目にかかる。近くのゲルに遊びに行く。通訳が男の子に、勉強している日本語を話してごらんと言った。恥ずかしくてゲルの外に出ていった。数キロ先の草原でオス馬がメスを追掛け廻している。男の子が他に人がいないことを確認して私に近寄って来て、小さな声で1、2、3、4、～と日本語で数字を発し始めた。私も小さな声でイチ、二、サン、～と。その日初めて馬に乗った。温泉にも入った。ボンジュールとフランス人がいた。真夜中の天体観測、さほどでもなかった」と。この旅行中、仙台の木村さん、蝶々の研究家の木村さんという言葉が同行者からしょっちゅう聞かされた。鈴木さんも仙台でしょう？と。帰国して数人に問い合せてみた。その時点で知り得たのは『高名な東北大学理学部の教授さん一家のことで、お子さん達は附属小・中の出身ではないかと』

その木村さんに巡り合ったのはこの北社会でした。

モンゴルに行った翌年の2007年9月21日、第255回北社会は会場は池袋、講師は石井彦壽氏（高12回）でした。数人の初参加者に自己紹介をお願いしました。最後の方が「今年もモンゴルで蝶々を追っ掛けてきました」と。瞬間、アタマがくらくらとして、エエ～彼が“仙台の木村さん”。ビックリしました。本日の講師・木村氏との予想もしていなかった出会いでした。同氏は二高時代、生徒会長ですから一年上の私も投票した筈なのに後輩のことは憶えていないのですね。でも、知合ってから、懇意になり、“ホランの会”にも入会いただき、本日皆さんに配布したパンフレットの制作を初め強力な助っ人で日本とモンゴルの草の根交流を支えていただいております。1996年から毎夏、モンゴルに通いつめておられる。皆さんご承知の如く、先月の大統領選挙で元首相で46才のエルベグドルジ氏が当選した。例えば一つの社会問題・交通渋滞。モンゴルの道路は車は右側通行だが、車の輸入先によって右ハンドルと左ハンドルが半々で、道路の秩序も保たれていない。モンゴル国としての課題も山積している。新大統領は懸案の汚職体質の改善、そして民主主義・自由・人権を守り、国民が権力者を監視するシステムを作るだろうと期待されている。日本との友好関係は全面的に促進するだろうとの評判のようです。本日は木村氏からモンゴルの花や蝶、子供達との交流などを紹介いただきながら、モンゴルの環境問題についても考えてみてください。三人の留学生も本日は参加しております。優秀な女性達です。活発な意見交換の時間を過ごせればと期待しております。

(2) 来月の北社会 開催日：7月22日(水)

講師：日野三十四氏(高15回)モノづくり経営研究所イマジン所長
日本アイ・ピー・エム(株)顧問

テーマ：「一介のサラリーマンが55歳で独立して米Shingo Prize
を受賞するまで」

概要：

人は自分の思うようにしかならない(思うようになる)といわれるが、それを実感しているこの頃である。小生は2000年まで一介のしがないサラリーマンだったが、経営コンサルタントになるべく飛び出し、2001年に合格率2%の中小企業診断士を取得、2002年にダイヤモンド社からビジネス本出版、2003年から韓国、台湾、アメリカ、タイ、中国で翻訳出版、2007年に製造業のノーベル賞といわれる米Shingo Prizeを受賞した。その間にアジア最強の韓国3社、日本最大の重工業会社や電機会社などでコンサルをし、いまは日本IBMの顧問をしている。身の丈を超えるゴールを描き、シナリオを設定して、不安を払拭して取り組み、夢は実現するものだということを、我々の子供や後の世代に伝えたい。

(3) 高11回・同期生 海老名卓三郎君
(財団法人仙台微生物研究所・理事長)

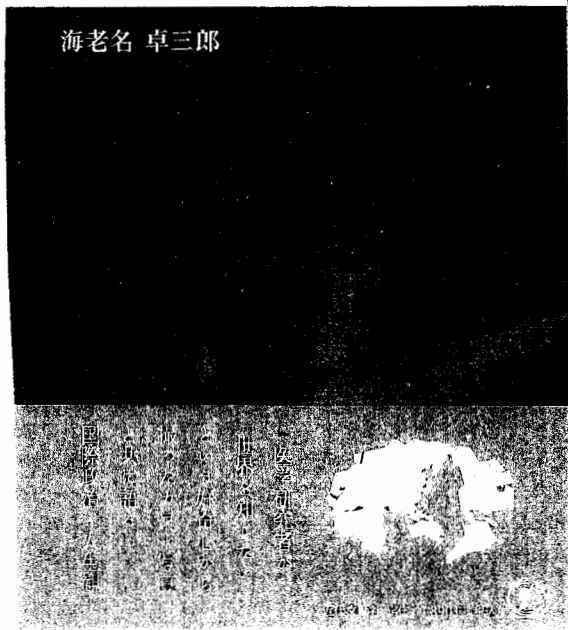
写真集を発売。興味をひかれた一つを紹介します。地球温暖化について、赤祖父俊一博士(東北大・理学部卒・アラスカ大国際北極圏センター所長)によりますと地球の気候は数百年という単位で温暖化と寒冷化を繰り返しており、1800年頃から気温が上昇しているとのこと。人類活動による温室効果ガスが主たる原因だとする現在の論調とは全く異なった考えもあると、知っておくべきと思ったと海老名君は書いている。

下記の「天声人語」は6月11日。
みずみずしい感性が懐かしい！！

世界35ヶ国 写真集

林住期を如何に過ごすか

海老名 卓三郎



天声人語

ページを繰りながら、上前淳一郎さんが週刊文春に連載したコラムの題(読むクスリ)を思い出した。子どもの無垢な発言を集めた本紙投稿欄「あのね」の朝日文庫版だ。オトナに疲れた時の軽い栄養剤として、いくつか紹介したい▼その日の服の双子に、大抵の大人は微笑を返すだろう。子どもは違う。「どっちが本物の？」(彩音4歳)。「世は謎だらけである。ぬかみそにナスを漬け込む祖母には「どうして隠すの？」(恵理4歳)▼みんな残酷なまでに正直だ。犠牲者は母親が多い。久々に緊張してハンドルを握れば「怪獣の目で運転してる」(友大4歳)。化粧中に「まゆげの修理？」(裕貴3歳)。体重計の上で「やばーい」(祥2歳)もママのまねらしい▼何を思うのか、妙なつぶやきもある。一人洗髪しながら「妹は、いつまでたっても妹……」(香子6歳)。風呂上がりのミニアイスをほおぼって「おれの一日はこれで終わった」(明央5歳)。晩酌みたいなものか▼友だちの風船が空へ。母は「かわいそうねえ」と常識に従うが、子は「でも雲は喜ぶね」(京佳4歳)。逆さまの発想は金子みすゞの詩に通じる。認可保育園に入れられず、母の目に涙。すると一仲間に入れてほしい時は、大きな声で言えば入れてくれるよ(八重4歳)と、また泣かせる▼大きく膨らんだカーテンにしがみついて「風つかまえた！」(絵里4歳)、サイダーのコップに耳を近づけ「夏の音がするよ」(道郎5歳)。みずみずしい感性、はじけ合う季節が、梅雨空の向こうに待つ。